
冷気が薫る

矢口優佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冷気が薫る

【Nコード】

N9827A

【作者名】

矢口優佳

【あらすじ】

お母さんがいなくなつた。置いて行かれた私は冷蔵庫のそばを離れられない。

私は今、冷蔵庫の前に立っている。

暗闇に低く響く機械音。そして外は雨。

私の家から遠ざかっていく車の音が聞こえた。

「臭いから、こっち来ないで」

親友のカナコにそう言い放たれたのが中学校の入学式。

カナコに制服をぐちゃぐちゃにされたのが初夏。

どうやら私は臭いらしい。

中学に入ってから急にカナコが派手になり、私を汚い物を見るような目で睨み口を開けば臭いと言うようになった。

家が隣同士で小さい頃はあんなに仲が良かったのに。

「あの子、お父さんいなくて、母子家庭なの。あの子のお母さんいつも違う男の人を家に連れて来てるんだよ。不潔じゃない」

カナコが新しい友達に、私に聞こえるように大きな声で、そんなことを言っていた。

「あの子って、伊藤愛のこと？」

「そう。昔から友達面してきてウザかったんだけど、なんか最近異様に臭いんだよね。最近家にお母さん帰って来ないみたいだから、お風呂にも入ってないんじゃない？」

口の片端を上げてカナコが言う。

「前からウザがられてたみたいだけど、ついに捨てられたんだよ。ま、愛を捨てたお母さんの気持ちも分かるけどね」

そうだよ、お母さんはきつともう帰って来ない。私、捨てられたんだと思うの。でもなんでそれをカナコが笑うの。

「なに話してるの？」

楽しそうに話しているカナコの周りには人が集まってくる。明るくて可愛いカナコ。きっと誰もが彼女のことを好きになると思う。たとえ私にだけ残酷なカナコでも。

「伊藤愛？誰それ。学校来てたっけ」

「そんな人、知らないんだけど」

「あはっ。皆酷いなあ。まあ、存在感ない子だし、いないも同然だけど」

カナコが笑う。私は教室から離れて、そっと学校を出た。

私は誰もいない家に向かう。学校に戻る気にはなれなかった。

「あら、愛ちゃん」

帰る途中でカナコママに会った。隣の家に住んでるから、庭先で会うことがよくある。

「どうしたの？こんなに早く帰ってきて。顔色悪いわよ。気分でも悪いの？」

カナコママは優しいくて大好き。臭いとよく言われる私に嫌な顔ひとつしない。

大丈夫です、と一言だけ言って、私は自分の家に帰った。

家の中は暗い。お母さんがいなくなった日から、私は部屋の電気を点けないようにした。

ただ冷蔵庫の音だけは響いている。この冷蔵庫の電気だけは消すことが出来ない。

けれどそれは静かな部屋で存在を主張するように低い機械音を唸らせ私に気づいて、と訴える。

それが嫌でたまらないのに、私は前に重い足を引きずりながら扉に近づいた。

冷蔵庫の扉に触れると冷たい表面からわずかな振動が指に伝わった。

お母さん、ごめんね。戻って来て。殴られても蹴られても、もう泣かないから。

扉の前でそう呟いてみたけど、何も変わらないことは分かってる。

ピンポン、と家のチャイムが鳴った。いつの間にか寝ていたようだ。

「愛、いるんでしょ！」

カナコが家の前で怒鳴っているのが聞こえた。

「学校から疲れて帰って来たって言うのに、ママがあんたの様子見てこいつて言うのよ。しょうがないから、来てやった。ていうかこの家マジで臭いんだけど。異常だよ、なんか腐ってるみたい。お母さん帰ってくるのあてにしてないで片付けくらい自分でやれよ」

ほつといて。あんな優しいママがいるカナコになんて言われたくないよ。私は言った。

「はあ？あんたの家が臭いところちまで匂ってくるから迷惑なんだよ！いいよ、じゃあ私が捨ててやるよ」

いいよ！

カナコは勝手に上がりこんで、私の家の探索を始める。

やめて。

カナコの手をつかんで止めようとしたけどそれは簡単に跳ね除けられた。

「部屋の電気くらい点けろよ。まともに動いてるのあの冷蔵庫だけじゃん」

その冷蔵庫には触らないで。

「なんか腐った匂いなんだよ。どうせ食べ物腐らせてるんでしょ」
開けないで。

「腐らせるくらいだったら、うち来ればいいじゃん。あたしはともかく、ママ喜ぶんじゃない？」

カナコが冷蔵庫を開ける。

やめてよ！

中の電気が点灯して、冷気が溢れ出した。
冷蔵庫の中身を見て、一瞬カナコの動きが止まる。

目の前にあるものが理解の範疇を超えていたようだった。

「え……？」

中身を理解した途端、カナコは震えながら叫ぼうとして悲鳴にならない声をヒューヒューと漏らす。

見られた。きっとカナコは私に聞く。

これってなに？って。もう駄目だ。

そう思った瞬間にカナコの体は大きな音を立てて倒れた。

最期にカナコはなんて言った？

ごめんねカナコ。倒れたカナコに私は言う。

手に持った包丁から血が滴り落ちるのを見たあと、私はカナコを冷蔵庫にしまった。

「愛ちゃん、お邪魔してもいいかしら……」

数時間、いつまでも帰って来ないカナコを心配して、カナコのママが私の家を尋ねてきた。

でも残念、この家にお客を迎える事が出来る人なんていない。

「愛ちゃん、いるの……？」

でもカナコのママは私の臭いに気が付いて、勝手に家に上がりこんできた。なんて勝手な人。カナコそっくり。

「ひっ」

カナコのママが水溜りを踏んだ。それはカナコの血だったけど、暗闇では分らない。

慌てて電気を点けようとしても、点かない。

カナコのママ、どうしてそんなに震えてるの。どうしてそんなに泣きそうなの。私そんなに臭いの？

「愛ちゃん？」

カナコママが私とカナコと一緒に隠れている部屋の扉に指をかけた。

どうして私たちの居場所が分かるのかと思ったら、カナコの血と私の臭いをたどればすぐ分かることだと気づく。

ゆっくり開けた扉から漏れる光が私達の姿を照らした瞬間に、カナコのママの悲鳴が暗い夜に響いた。

私とカナコは冷蔵庫で発見された。

私はお母さんに首を絞められて殺されて、冷蔵庫に押し込められた。それは半年ほど前の事。

冷蔵庫の中にいた私は、3ヶ月もすると、冷蔵庫の中にも徐々に腐り始めて異臭を放った。

皆驚いてる。それもそうね。

ねえカナコ、私が臭かったのは仕方なかったのよ。身体が、どんどん腐っていくから。

「そんなはずないんです。私、今日も愛ちゃんを確かに見ていたのよ。死後半年以上なんてありえないわ！」

誰もカナコママの言うことなんて信じなかった。

それも当然なの。カナコとカナコママ意外、私の事なんて誰も見ていない。気にもとめていなかった。

私はちゃんとしたのに、気にかけてくれたのはずっと二人だけだった。

二人には気づかれないように私が振舞っても、それでも異臭にさえ気づいてくれた。

ごめんね。

ごめんね。

ごめんねカナコ。

寂しかったんだよ、カナコ。

「どうして、カナコ……」

カナコママが悲しそうに泣いているのを私はごめんね、と繰り返しながら眺めてた。

カナコがどうして私と一緒に冷蔵庫の中に隠れていたかは、きっと誰も気づかない。

私は今、冷蔵庫の前にいる。

警察に回収されたそれはもう何も音も立てることはない。

冷えた保管室の中でもまだ私はここから離れられない。

（後書き）

読んでくださった方、本当にありがとうございます。
感想・ツッコミ等戴ければ泣いて喜びます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9827a/>

冷気が薫る

2010年10月26日09時24分発行